

# 新美南吉「おぢいさんのランプ」小考

伊 藤 眞 一 郎

った巳之助が、ハツ当りに、村会の議長役の区長さんを逆怨みして放火しようとし、寸前の所で分別を取り戻し、自己の非を悟る、そういう場面である。

「おぢいさんのランプ」は立身の願いを抱く孤児の巳之助が、ふとしたとき、かけからランプ屋となり、文明開化の潮流に乗って商売人として成功を収めるが、やがて新たに出現した電燈に脅威を覚えて様々の抵抗を試み、だが結局は、自分の言動の愚かしさを反省し、長年のランプ屋を廃業、本屋の商売に新しい生活を見出してゆくという内容を、今は本屋の楽隠居となっている巳之助老人の、孫を相手とする昔話の形で、物語った作品である。作品のテーマは、主人公のランプとの出遭いから別れまでの経過を通して、一人の人間にとっての仕事の意味を明かすところにあるものと見られるが、ところで、本作品を読み終えた読者は、主人公巳之助の、ランプ屋廃業およびそれに引続く本屋への転業という行動に、巳之助にとつて問題は万事解決したのだろうか、という疑問を覚えずにはいられないのではなからうか。と言うのも、巳之助は、固執し続けたランプと訣別するのに、充分に説得力を持つ論理を必ずしも見出してはいないように思われるからである。

むしろ、確かに、巳之助のランプとの訣別の決意は、次のように明確に示されている。村に電燈が引かれることに決まったのを知

巳之助は、今になって、自分のまちがつてゐたことがはつきりわかつた。——ランプはもはや古い道具になつたのである。電燈といふ新しいいつそう便利な道具の世の中になつたのである。それだけ世の中がひらけたのである。文明開化が進んだのである。巳之助もまた日本のお国の人間なら、日本がこれだけ進んだことを喜んでいいはずなのだ。古い自分のしやうばいが失はれるからとて、世の中の進むのにじやましようとしたり、何の怨みもない人を怨んで火をつけようとしたのは、男として何といふみぐるしいぎまであつたことか。世の中が進んで、古いしやうばいがいなくなれば、男らしく、すつぱりそのしやうばいは棄てて、世の中のためになる新しいしやうばいにかはらうぢやないか。(注し)

改めての説明を要しないほどに、ここでの巳之助の論理は単純明快である。まず、巳之助には「文明開化」は、何らの疑いをさしはさむ余地のない、至上の価値である。ランプ屋は、かつては、その

至上の価値たる「文明開化」に合致し、それを積極的に推進する仕事でありえた。しかし、現在では、ランプ以上に新しく便利な、したがって「文明開化」の推進役によりふさわしい電燈が、出現している。そうである以上、古いランプ屋商売を棄て去ることこそ、「文明開化」推進の第一歩である。ランプへの執着は、きつぱりと断たねばならない……。

巳之助のこうした論理の要となつてゐるのは、「便利」ということを価値判断の尺度とする、実利的な価値観であると言つてよい。巳之助にとつては、文明の利器により日々の生活が便利になつてゆくことが、ひいては世の中の進歩・発展、人々の幸福につながるのであり、世の中のそうした動向に貢献する仕事こそ、自分の振るべき仕事なのである。

この論理は、もし巳之助のランプに見出した価値が「便利」という実利性のみであつたのであれば、確かに、電燈時代でのランプへの執着を、自己矛盾として却ける力を持つ。そして、「電燈がランプよりいぢだんすゝんだ文明開化の利器であるといふこと」が理解できない巳之助を、作者が、へりこうな人でも、自分の職を失ふかどうかといふやうなときには、物事の判断が正しくつかなくなることもあるものだ。という風に、己が糊口の職のことしか考え及ばなくなる人間一般の利己性として批判するのも、納得しうる。しかし、巳之助がランプに見出した価値は、果たして、実利性のみであつたのか、また、彼がランプ屋の商売により目指したのも果たして、文明の利器の「便利」さを他の多くの人々に頒つという、単にそれだけのことだつたのか、と言えば、必ずしもそうではない。巳之助

がランプに見出したものは他にもあつた。とすれば、巳之助が、ランプへの執着を自己矛盾として気付き、作者が、「便利」を他の人々に頒つ生き方から逸脱した彼の利己性を批判しただけでは、問題は完全に片付いたとは言えないのではあるまいか。本質的には、巳之助の問題は片付いていないにもかかわらず、この作品では、ランプ屋の廃業により、片付いたかのように扱われている。読者としては、その点がどうしても引掛つてしまふのである。

## 二

巳之助がランプに見出したものとは、それでは、どのようなものだったのか。

彼とランプとの最初の出遭いは、次のように語られている。

巳之助はその町で、いろいろな物をはじめ見た。(中略)／＼しかし巳之助をいぢばんおどろかしたのは、その大きな商店が、一つ一つともしてゐる、花のやうに明かるいガラスのランプであつた。巳之助の村では夜はあかりなしの家が多かつた。まつくらな家の中を、人々はめくらのやうに手でさぐりながら、水薬や、石臼や大黒柱をさぐりあてるのであつた。すこしせいたくな家では、おかみさんが嫁入りのとき持つて来た行燈を使ふのであつた。(中略)／＼しかしどんな行燈にしる、巳之助が大野の町で見たランプの明るさにはとても及ばなかつた。／＼それにランプは、その頃としてはまだ珍しいガラスでできてゐた。煤けたり、破れたりしやすい紙でできてゐる行燈より、これだけでも巳之助にはい

いものやうに思はれた。／このランプのために、大野の町ぜんたいが龍宮城かなにかのやうに明かるく感じられた。もう巴之助は自分の村へ帰りたくないときへ思つた。人間は誰でも明かるいところから暗いところに帰るのを好まないものである。／巴之助は駄賃の十五銭を貰ふと、人力車とも別れてしまつて、お酒にでも酔つたやうに、波の音のたえまないこの海辺の町を、めづらしい商店をのぞき、美しく明かるいランプに見とれて、さまよつてゐた。／呉服屋では、番頭さんが、椿の花の模様が大きく染め出された反物を、ランプの光の下にひろげて客に見せてゐた。穀屋では、小僧さんがランプの下で小豆のわるいのを一粒つつ拾ひ出してゐた。また或る家では女の子が、ランプの光の下に白くひかる貝殻を散らしておはじきをしてゐた。また或る店ではこまかい珠に糸を通して数珠をつくつてゐた。ランプの青やかな光のもとでは、人々のかうした生活も、なにかしら、物語か幻燈の世界でのやうに美しくなつかしく見えた。

少々、長い引用になつたが、ここからは、巴之助にとつて、ランプが二様の価値をもつものであることが、読み取られる。一つは、言うまでもなく、近代的な照明具としてのそれである。夜は、あかりなしで手さぐりの生活をしていた巴之助の前に、ガラスのランプは、まず、行燈などと比べものにならないほど明かるいもの、その下では、反物を見たり小豆粒を選り分けたり、あるいは、おはじきをしたり数珠を作つたりができる、そういう便利な照明具として出現し、彼を驚嘆させたのである。明かるさが、文明の利器のもたらす

実利的価値——〈便利〉さとして、受け止められたのだと言ってもよい。と同時に、また右の場面で見逃せないのは、その明かるいランプに照明された光景が、単に光溢れる明かるい世界であるにとどまらず、あたかも〈龍宮城かなにかのやう〉な、〈物語か幻燈の世界〉のような光景として、巴之助の前に広がり、彼をして、〈お酒にでも酔つたやうに〉、町を〈さまよ〉わせている点である。ここには、巴之助にとつてのランプのもう一つの価値が示されている。ランプは、この世ならぬ夢幻的な美しい世界を現出させ、彼を恍惚とした情緒に誘う魅力をも、持っていたのである。先の〈便利〉さに対して、〈美し〉さという価値が示されているわけである。

この夢幻的な〈美し〉さは、〈便利〉さが、巴之助の日常的な生活での現実意識に見出された価値であるのに対してむしろ逆に非日常的な非現実の意識に捉えられた内的、精神的な価値であつて、後者とは、明らかに異なつた次元に属する。しかも、それは、巴之助の美的感受性とランプとの出遭いにおいてのみ、可能であつたらうことからすれば、一回性の、それゆゑ、彼にとつてはランプに固有の、本質的な価値であつた、とも言ひうる。なぜならば、小さな炎で周囲をこくさやかに照らす行燈は、夜の陰鬱な暗さをむしろ印象づける点で、また、真昼の眩しい明かるさをもたらす電燈は、夜を昼間の延長にしてしまう点で、いずれも巴之助をあくまで日常性に引き留めたであろうから。昼と夜・明かるさと暗さの渾然と親和した〈美しくなつかし〉い光景を現出し、彼を夢幻の非日常の雰囲気にと惹き入れるのは、恐らく〈ランプの青やかな光〉によつてのみ、可能であつたにちがいない。巴之助を捉えたやうな光景は他の照明

具によつてはありえなかつた、という意味において、その「美し」さは、彼にとつて、ランプの本質的価値だと言つてよいのである。むろん、この時点で、巳之助自身、それを自覚しているわけではないが。

このような形でランプと出遭つた巳之助に、〈今はじめて文明開化といふことがわかつたやうな気が〉する。ここで「わかつた」というのは、世の中が「便利」になつたという、ただそれだけのことを指すのではない。「便利」な文明の利器の出現と共に、人々の生活が、それまでとは別様の、〈物語か幻燈の世界のように美しくなつかし〉いものに変貌しつゝあること、そして、そうした世の動向こそがいわゆる「文明開化」にはかならぬのであること、そのように了解されたということなのである。「便利」と「美」との調和したイメージにおいて、「文明開化」の語が、了解された、と言つてもよい。ランプに見出された二様の価値は、かくて、「文明開化」という世の中の動向の意義にまで、拡大して受け止められたことになる。

町をさまよい歩いた末に、巳之助がランプを手に入れようと、とある店に入つて行つたのは、したがつて、單なる物珍しさや利便のためなどからではもとよりなかつた筈で、夢のような明かるさ・美しさを、言葉の上でしか知らなかつた「文明開化」なるものを、何よりも自分の手にしたからであらう。ところが、持ち合せの金額では足りないのに困惑してつい「御値で売つとくれ。」と言つたのが弾みとなつて、巳之助は思いがけなくも、本当にランプ屋商売を始めることになり、巳之助とランプとの関わりは、新たな局面

へとさらに進展することになる。

藪や松林のうちつづく暗い峠道でも、巳之助はもう恐くはなかつた。花のやうに明かるいランプをさげてゐたからである。／＼巳之助の胸の中にも、もう一つのランプがともつてゐた。文明開化に遅れた自分の暗い村に、このすばらしい文明の利器を売りこんで、村人たちの生活を明かるくしてやらうといふ希望のランプが。

やがてランプ屋として一応の成功を見た巳之助は、今まで暗かつた家に、だんだん自分の売つたランプがともつてゆくのを眺め、村の家々に「文明開化のあかるい火を一つ一つともしてゆく」のだという満足感を覚えるのだが、ランプ屋としてのそうした思いや、先の「村人たちの生活を明かるくしてやらう」という意気込みが、ランプの「便利」さのみを念頭に置いたものではないことは、もはや言うまでもあるまい。巳之助にとり、ランプ屋の仕事は、彼自身の見出したかけ替えのない価値、ランプならではの固有の「美」を、他の人々にも頒ち、その「便利」さと共に、共に享受するということ意識を持つていたのである。そして、そのことは、他面から言えば、孤児として育ち、立身を念願してきた巳之助は、ランプ屋の仕事によつてようやく、「文明開化」の社会での自己の固有の位置を、自己の存在意義を、見出したということでもある。「文明開化」なる言葉は、当初の巳之助にとつては、自己の存在価値を社会的に保証してくれるものでもあつたわけである。

ランプ屋の仕事が以上のようなものであったのだとすれば、電燈の出現に、〈脳天に一撃をくらつたやう〉な衝撃を受け、〈頭の調子がかくるつてしまつたやうな動揺を、巳之助が来したのは、ある意味で当然であつたと言えよう。〉

ランプが電燈に取つて代られるという時代に遭遇したとき、巳之助が立たされたのは、つまり、次のような状況だつたと言える。すなわち、ランプを社会と共有したことで巳之助の裡に結ばれていた、〈文明開化〉の調和的なイメージが、〈便利〉をもつぱらの尺度とする社会の実利的な価値観と、〈便利〉のみならず〈美〉をも要求する彼の価値観との齟齬の顕在化によって、大きく揺らぎ始める——そういう状況である。そして、それはまた、現実社会の〈文明開化〉に対して、彼の描いていた〈文明開化〉のイメージは、結局虚像にすぎなかつたことが明らかになつた、ということでもあり、さらに、巳之助の人生そのものの意味でもあつた、〈便利〉と〈美〉との両つながらを人々に頒つランプ屋の仕事の価値が、現実社会から相対化され、従来、彼が占めていた〈文明開化〉の社会での固有の位置が、再検討を迫られる、そういう事態でもあつた。電燈時代の到来に、巳之助が激しく動揺し、しやにむに抵抗しようとしたのは、たぶんそうした事態を知らず、ランプ屋の仕事もるとも自己の存在価値までもが否定される動きとして、受け止めたからであらう。

こうした状況を乗り越え、前向きにさらに電燈時代以降を生きてゆくためには、もちろん、巳之助はランプとは訣別しなければならぬ。だが、そのことは、直ちに、現実社会の〈文明開化〉の論理の前に、ランプを通して巳之助自身が描いた固有の〈文明開化〉の

イメージを否定し、それに同調しなければならぬということでは、決してない。

ところが、既に見た通り、巳之助は、ランプおよびランプ屋の仕事、無用の〈古い道具〉・〈古いしやうばい〉として否定し、ランプ屋への愛着の一切は、〈きたなく〉〈みぐるしいさま〉・〈意気地のねえこと〉として、一刀両断に断ち切つてしまつた。つまり、彼は、実利的な価値原則により進行する社会の〈文明開化〉の論理に殉じて、せつかく彼がランプに見出した固有の価値を、無価値だとして全面否定し、それへの抵抗感はずべて利己心として、圧殺してしまつたのである。ランプ屋への愛着の中には、実は糊口の職への執着ばかりではなく、ランプの夢幻の〈美〉を人々に頒つ仕事としての誇りや喜びも、あつたにもかかわらずである。ランプ屋の仕事が巳之助にとつて当初持つていた意味は殆ど無視される形で、ランプは実利的な価値観のみによって、切り棄てられたことになる。

巳之助のこうしたやり方は、彼自身の言によれば、一面確かに〈すつぱり〉として深い。しかし、こうした潔さは、また、いかにも短絡的である。社会での自己の位置を失うまいと焦るあまり、巳之助はかけ替えのないランプの〈美〉を、無視されているのではあつても必ずしも否定されているわけではないにもかかわらず、社会が否定したものと、自ら先回りして否定し、棄て去り、社会の一元的な価値観に自己を同化させたのであるから。

思うに、置かれた状況で彼が振るべきは、むしろ、かつて自分が描いていた〈文明開化〉のイメージを、自己内面に根柢を置く虚像のそれとして明瞭に自覚し、そうすることで、逆にその〈文明開化〉

のイメージを、現実に行進する〈文明開化〉に托す、彼自身の究極の夢に転化することであった。あるいはまた、文明の利器たるにすぎないランプを、〈文明開化〉への彼の夢（理想）と他の人々・社会（現実）とをつなぐ、巳之助の使命の象徴に、意味変換してゆくことであった。ランプという客観物とは訣別するにしても、ランプを通じて得られたものは、言わば内面化されたランプとして、保持され、継承されるべきだったろうと、思うわけである。したがって、この場合、巳之助にとってランプ屋を廃業するということは、かつてのランプ屋の仕事と等価の、新たなランプ屋の仕事を求める、ということではなければならなかった、とも思う。

こうした道が困難なものであることは、言うまでもない。だが、ランプとの関わりによって、〈美〉という、結局は己れ一人の内面にしか根拠を求めえない価値の存在に眼醒め、一度び個我の淋しさを知ってしまった巳之助にとって（説者はここで、ランプとの別れを決意した巳之助が、ランプとの最後のときを、〈人気がない〉夜更けの半田池で、岸の木にありつただけのランプを吊し、一人で水面に映る燈を眺める、という孤独な仕方でも過ごすのを想起すべきである）、前向きの積極的な生き方を貫徹させるとすれば、こうした困難を択る以外はなかった筈である。電燈の〈便利〉さによって、ランプの価値を否定してみても、問題は、実は巳之助にとって、真に解決したとは言えないのである。

#### 四

こうした性急な、短絡的な仕方でのランプとの訣別について、本

屋の隠居となつた巳之助老人は、「思ひついたら深くも考へず、ばつぱつとやつてしまつた」、「わしのやり方は少し馬鹿だつた」と言うのだが、しかし、それは、まだ充分売れる見込のあるランプの大半を、池の傍に棄ててしまふという、商売人としての目先の利かなさに対するもので自分の行動に対する根本的な反省ではない。むしろ、彼は、「わしのしやうばいのやめ方は、自分でいふのもなんだが、なかなかつばだつた」という風に自讃し、孫をして、「お祖父さんはえらかつたんだねえ」と感心させるのである。これまで見たように、ランプに関わる一切を投棄することは、従来の彼のランプとの関係からすれば、挫折であると言わざるをえないのだが、彼自身には、その自覚はついに訪れない。彼にあるのは、利己心を絶つて社会の動きに殉じたことへの満足のみである。

巳之助の生き方については、例えば、斎藤寿始子氏に、〈自己との戦いを、ランプをうちこわすことで象徴させる手法の背後に、日本の土着の宗教観にささえられた、現世に於ける死と再生の儀礼が認められる〉として、〈この原始的でたくましい再生儀礼によって、巳之助の自己は確立していった〉と見る評価がある一方、佐藤通雅氏のように、これを他の多くの新美南吉作品にも現われる、〈人と人との結びつき〉を「自己放棄」「滅び」によって獲得しようとする生き方の一つの例として捉え、そこに「日本の精神風土自体に根ざす弱さ」を指摘し批判する見方もある。<sup>33</sup>

改めて言うまでもあるまいが、私としては、巳之助は、基本的には佐藤氏のような批判的な眼で捉えられるべきだと思つている。挫折を知らず潔い巳之助の生き方は、表面上確かに「たくましい」と

評されなくもないのだが、ランプ屋廃業後の巳之助の内面的充実には触れない作者新美南吉において、巳之助のこの潔さは、果してどれだけ本気で信じられていたのかと、疑問に思わざるをえないのも事実なのである。巳之助の「へたくまし」さを感じる前に、まず、作者の巳之助に托する信頼の危うさを感じてしまふ。ただし、巳之助の「自己放棄」的な生き方に、〈日本の精神風土自体に根ざす弱さ〉を見る点については、最終的には、そういうことであろうかとは思ひながら、そう結論する前に、巳之助固有の精神構造が孕む問題として、ひいては恐らく作者新美南吉のそれが孕む問題として、もう少し考えておくべき点があるのではないかと考える。つまり、巳之助において、佐藤氏の言う「自己放棄」的な発想が現われてくるのはなぜなのか、ということである。

種々の要素が考えられるのだが、まず一つには、私は、巳之助がランプに見出した〈美〉の性格に、大きな原因があったのではないかと思う。先にも指摘しておいたように、巳之助がランプの燈のものとに見出したのは、ちようど、〈龍宮城かなにかのよう〉な、〈物語か幻燈の世界でのやう〉な、〈美しくなつかし〉い光景で、彼は、ランプの〈美し〉さを、何よりも非日常的な夢幻性において、発見したのである。巳之助自身は、この〈美〉をそのまま現実の世の中の〈文明開化〉がもたらす価値として了解したので、こうした〈美〉と現実の日常生活との関係について、改めて思慮することもないのだが、こうした夢幻性へ傾斜する意識は、現実の日常的、生活的な事象に向う意識とは、多分に異なる志向性を持つものである。と言ふよりは、多くの場合、日常的・生活的な事象への嫌悪やそれから

の逃避として、こうした〈美〉への傾斜が生じるので、この夢幻性への共鳴は、むしろ日常的・生活的な意識とは相反するもの、敢えて言えば、現世否定的な性格のものと見るべきであろう。

巳之助は、立身への強い意欲と〈世の中のために〉という倫理感を持つ、現実志向・他者志向の旺盛な人間であるが、その彼がこのような〈美〉への傾斜を持つのだとすれば、結局、彼の中には、日常現実をめぐつての二様の、背反的な志向性が、すなわち、日常現実への牽引と反撥、そしてそれらと表裏する形での非日常的な〈美〉への牽引と反撥が、存在することになる。彼が、ランプに関わる一切のものを、彼固有の価値を、全面的に否定し去り社会の動きに殉じる道を択らざるをえなかったのは、単にそれが〈便利〉でないからではなく、彼自身が見出したランプの価値、夢幻の〈美〉が日常現実への志向性からすると、逃避的な後暗いもの、否定せざるをえない現世否定的な性格の〈美〉だったからではないか、と思われる。つまり、巳之助にとつて、彼固有の内的価値が、本来的に、彼の現実志向・他者志向とは矛盾する性格をもっていたがために、「自己放棄」というゆき方をとらざるをえなかったのではないか、ということである。

もちろん、巳之助自身、自分の中にこのような矛盾が存在することに気付いているわけではないし、ましてや、彼のランプをめぐる苦悩の中心が、このような〈美〉をめぐる矛盾・葛藤にあるのであることは、言うまでもない。しかし、無意識裡にも、そうした〈美〉への否定的な意識が作用したと、心理的な解釈をするのでなければ、巳之助において、電燈の前にランプの〈美〉までもが、その実利性

もろとも棄てられてしまふ事情は、納得しにくいのである。再度くり返せば、巳之助は、ランプに見出したような「美」を、さらにそれを通して彼が描いた「文明開化」のイメージを、電燈の時代以降は保持してはならないとするような論理は、ついに見出しえてはいないのである。

右のことも相関していると思われるのだが、「自己放棄」的な発想の出でくるもう一つの原因として、巳之助の場合、現実社会のあり方が、初手から疑うべからざる不可変のものと前提されているらしいことも、挙げねばならない。巳之助は、現実に行進する「文明開化」と彼の思い描くそのイメージとの食い違いに際会したとき、自分のイメージの非を疑う一方で、結論はともかく、一度は現実社会の「文明開化」をも疑ってみる余地はあった筈なのだが、八ツ当りこそすれ、社会の「文明開化」の動きそのものに批判の眼を向けるということは、遂にすることはない。「文明開化」は至上命令なのである。彼にあっては、現実はずめ絶対化し固定化され、批判や否定の余地は、自己自身の方にしか残されていないわけである。

\*

現実の絶対化と、その絶対化・固定化された現実への諦念がもたらす、現世否定的とも言える「美」への傾斜と——巳之助の精神構造は恐らくこうした形で把握できるが、ところで、これは、先にも触れたように、どうやら基本的には、作者新美南吉、文学者として倨傲とも言える強い自尊心を抱きながら、現実社会の世俗の論理には却って足を取られがちであったように思われる作家、の精神構造でもあったようである。が、それらの点については、また、他の作

品をも視野に入れた形で別の機会に述べることにし、些か不備な形の作品論になってしまったが、「おちいさんのランプ」の孕む問題を指摘しえた所で、本稿はひとまず結びとしたい。

註

(1) 純橋達雄校訂、直筆稿「おちいさんのランプ」本文(昭17・4・2執筆)による。「日本児童文学別冊・新美南吉の世界」(ほるぶ教育開発研究所、昭51・7)所収。以下の引用もすべて同じ。

(2) 大藤幹夫編「展望日本の児童文学」(双文社出版 昭53・5)所収解説。

(3) 「新美南吉童話論」(牧書店、昭45・11)

(安田女子大学講師)